

平成25年度 肥料農薬委託試験成績

I. 福島県農業総合センター(一般)

1. 水稲

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
1	水稲・麦栽培におけるP、K減肥基準策定のための連絡試験(水稲単作におけるP、K減肥基準の策定)	浜地域研究所	JA全農(全国本部)	継(H21～25)	リン酸低肥沃ほ場に対しリン酸及びリン酸カリ低減肥料を連年施用し、5年目の稲の生育、収量、品質への影響を検討したが、収量及び品質への影響は認められなかった。
2	水稲疎植栽培法の安定化に向けた効率的施肥技術の検討	会津地域研究所	ジェイカムアグリ(株)	新(H25～26)	水稲疎植栽培(11株/㎡)における高窒素成分、各種緩効性肥効タイプ配合肥料の肥効を検討したところ、溶出タイプLP40～LPS80を配合すると穂肥を省略でき、基肥－穂肥施肥体系と同等または同等以上の収量を確保できることが明らかとなった。
3	メテオ剤(ペントキサゾン)の雑草稲に対する除草効果確認試験	会津地域研究所	北興化学工業(株)	新(H25)	赤米などの雑草稲の異品種混入による品質低下を防ぐため水稲用除草剤ペントキサゾン(商品名:メテオフロアブル)の除草効果を検討したところ、処理34日後では対照薬剤のピラゾレート(サンバード粒剤)に比べ30%の出芽割合であり、また、慣行のプレチラクロール(ソルネット1kg粒剤)と同等の効果が認められた。

2. 野菜

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
4	転炉スラグ・発酵鶏ふん活用によるホモブシス根腐病回避技術の確立	作物園芸部	JA全農(県本部)	新(H25～26)	定植時に発酵鶏ふん施用と同時に培養菌株により接種してホモブシス根腐病に対する発病抑制効果を検討したが、実用的な抑制効果は認められなかった。
5	トマトの隔離床栽培における肥効調節型肥料による低コスト省力栽培技術の確立	作物園芸部	JA全農(県本部) ジェイカムアグリ(株)	新(H25～26)	水稲育苗ハウスを活用して、育苗ポットのまま同じ収穫期間で慣行(土耕)と同等の収量を得るには6寸ポットの容量が必要であると考えられた。今後はポット栽培の適正な施肥量を検討する。
6	ブロッコリーにおける肥効調節型肥料による減肥体系の確立	作物園芸部	JA全農(県本部) ジェイカムアグリ	新(H25～26)	試験成績とりまとめ中

3. 果樹

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
7	ナシの効率的施肥技術確立試験	生産環境部	太平物産(株)	継(H23～25)	肥効調整型肥料を用いた一発施肥(窒素:リン酸:カリ=20.8:11.4:11.4(kg/10a))による省力化と環境負荷軽減を伴った効率施肥技術を検討した。その結果、浸透水中のT-N、NO ₃ -Nの溶脱量は昨年とほぼ同等であったが、表面流水による溶脱は少なかった。土壌からのN溶脱+果実からのN持出量は20～25kg/10aであり、肥効調整型肥料による一発施肥による日本ナシほ場の土壌肥沃土と収量維持には十分と考えられた。
8	リンゴのヒメボクトウに対する防除体系確立試験	果樹研究所	JA全農(全国本部)	新(H25～26)	性フェロモン剤のヒメボクトウ雄成虫に対する交信攪乱効果は高く、スタイナーネマカーボカプサエ剤及びフルベンジアミド水和剤処理と合わせた体系的な防除は、リンゴのヒメボクトウに対して高い防除効果があることが示唆された。
9	モモ・ナシの共通防除体系におけるナシ病虫害に対する防除効果試験	果樹研究所	JA全農(全国本部)	継(H24～25)	5月上・中旬以降、慣行防除体系を改変し、モモ、ナシに共通に登録のある殺菌剤を選択した2種類の防除体系でナシ黒星病及びナシ輪紋病に対する防除効果を検討したところ、慣行防除体系と同等の防除効果が得られた。また、害虫防除については主要害虫及びハダニ類に対する防除効果は、慣行区と比較し共通防除体系により優れるか又は同等の防除効果が得られた。
10	リンゴのヒメボクトウに対する新殺虫剤の食入阻害効果の検討	果樹研究所	フェニックス普及会	継(H24～25)	リンゴの枝幹害虫であるヒメボクトウの成虫発生初期(7月上旬～下旬)にフルベンジアミド水和剤(商品名:フェニックスフロアブル)4,000倍を散布すると、ふ化幼虫の枝幹への食入阻害効果が高いと考えられた。
11	クワシロカイガラムシ属における防除効果確認試験	果樹研究所	日本農薬(株)	新(H25)	クワシロカイガラムシ属が優占するモモ園においてフプロフェジン水和剤(アプロードフロアブル)とスプレーオイルの混用による防除効果は判然としなかった。薬害は認められなかった。今後多発条件での検討が必要である。
12	ブドウクビアカスカシバの防除効果確認試験	果樹研究所	協友アグリ(株)	新(H25)	ブドウのクビアカスカシバに対して虫糞が十分確認できる9月下旬及び10月上旬にスタイナーネマカーボカプサエ剤(バイオセーフ)を処理したが、防除効果は判然としなかった。今後、処理時期及び処理方法について検討する必要がある。

平成25年度 肥料農薬委託試験成績

II. 福島県農業総合センター(放射性物質吸収抑制関連)

1. 水稲

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
13	放射性物質吸収抑制技術の開発-水稲 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	生産環境部・作物園芸部 (二本松市小浜地区)	JA全農(全国本部)	継(H24～26)	水稲を対象としたゼオライトの放射性Cs吸収抑制効果を検証したところ、ゼオライトは施用2年目も土壌の交換性カリ含量を無処理よりも高く維持し、玄米の放射性Cs吸収抑制効果が認められた。
14	放射性物質吸収抑制技術の開発-水稲 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	浜地域研究所 (相馬市玉野地区)	JA全農(全国本部)	継(H24～26)	水稲にゼオライトを50kg/a以上散布することにより、施用2年目においても玄米の放射性物質吸収抑制の傾向が認められたが、カリウム資材の追肥効果については判然としなかった。

2. 大豆

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
15	放射性物質吸収抑制技術の開発-大豆 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	生産環境部・作物園芸部	JA全農(全国本部)	新(H25～26)	ダイズの放射性Cs吸収における堆肥とゼオライトの施用効果は判然としなかったが、土壌中の交換性カリ含量を40mg/100g以上に増大させることで、前年度にダイズ子実の放射性Cs濃度が100Bq/kgを超えたほ場において、10Bq/kg未満に抑制することができた。

3. 野菜

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
16	放射性物質吸収抑制技術の開発-野菜 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	生産環境部・作物園芸部	JA全農(全国本部)	継(H24～26)	①畑わさびを林内ほ場で硫酸カリの基肥施肥量を30kg/10a、60kg/10aと増やすと放射性Cs吸収量は低減するが、いずれの区も100Bq/kg以上であった。②タラノメを新植する場合土壌交換性カリ含量を高めると枝中の放射性Csは吸収抑制された。③ミョウガの在ほ株への硫酸カリの地表面施用では26kg/10a、39kg/10aと増施しても可食部(花)での放射性Csの吸収抑制効果への影響は判然としなかった。

III. 県植物防疫協会委託 (果樹)

No.	試験課題名	試験希望場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
12	コンピューター設置果樹園におけるハダニ類とカブリダニの調査と天敵増加の解析	県植物防疫協会 (防除コンサル(株))	JA全農(県本部)	継(H24～26)	福島市内の果樹園にはケナガカブリダニ、ミヤコカブリダニ及びフツウカブリダニが広く分布しており、ケナガカブリダニやミヤコカブリダニが下草でのナミハダニやカンザワハダニの密度を抑制していると考えられた。樹上でこれらのハダニ類が一時的に増殖しても両種のカブリダニ類も増えてこれらのハダニ類を抑制していると考えられた。今後は物理的防除剤による実証や捕食性天敵の利用方法などを考慮しつつ、ハダニ類の発生状況に応じた防除対応の仕組み作りが重要と考えられた。